

研究室めぐり [V]

茨城大学理学部物理学教室

この教室に、“宇宙物理学”という学科目が掲げられることになったのは、1967年の文理改組の時である。この看板は、天文好きの高校生には、関東甲信越の数ある大学の中で、東大を除けば唯一の天文の看板として注目されているらしい。天文を志して茨大をめざす受験生がわざわざ訪ねてきたり、問い合わせの電話がよくかかってきたりするからである。宇宙論の議論をふっかけに来る新入生にもよく出くわす。

時々、宇宙物理の研究交流ゼミを開くと、沢田、石塚、菅野、野本（以上物理）、中村（数学）、田中（教育）といった面々が集ってくる。物理教室の全スタッフは、4学科目12名だから、教室の天文への理解と関心の度合いはかなりのものと言えるだろう。議論のテーマは、天体プラズマ、星や銀河の爆発現象、気体力学といったところ。

茨大のような地方大学で、天文の研究と教育を大いに伸ばそうとするには、それなりの意欲と努力が必要である。自前の武器をそろえること、研究のつながりを有機的にして特色を出すこと、他大学との交流を盛んにすること等を心がけている。この間、天体観測所設置計画、宇宙地球科学科構想が、かなりの段階まで煮詰められた。だが、いずれも厚い壁に阻まれて、日の目を見なかった。天文をとりまく空気はまだまだ冷たいのである。後者の構想が、53年度から地球科学科を設置し、その中に惑星地球物理という学科目をつくる形で生かされることになったのは不幸中の幸いというべきか。今や天文学に不可欠の道具となったコンピューターについて言えば、東大の端末を設置して、何とかやりくりができるようになってきたところである。

天文教育は今のところ講義だけ。教養での宇宙地球科学、専門課程での宇宙物理学、それに天文の集中講義を毎年、いろいろな先生方をお願いしている。教育がいいせいなのかどうか、卒業研究のゼミでは、天文系の人気はかなりのものらしい。新設の地球科学科では、新入生の中に天文をやりたい学生が多くて困っているという話を聞いた。

博士課程をもつような大学との差を一番感じるのは、研究室に四六時中うろうろしているような大学院生がいるかないかということである。茨大にも、この春から修士課程ができることになった。新しい活力を生む契機としたいものだ。（野本憲一）



◇ 5月の天文暦 ◇

日時	記	事
4 13	上弦	
5 7	月	最遠
6 12	立夏	(太陽黄経 45°)
10 13	土星	留
10 15	天王星	衝
12 11	望	
18 18	月	最近
19 9	下弦	
22 1	小満	(太陽黄経 60°)
26 9	朔	
30 8	水星	外合

◇ 5月の日月惑星運行図 ◇

